

## 歴史紀行

前回に引き続き、動物の名前を冠した古墳を紹介します。今回は「白鳥陵古墳(前の山古墳・軽里大塚古墳)」で、つまり日本武尊(白鳥)白鳥陵のことです。日本書紀には「日本武尊は東国遠征の帰り道、伊勢・能褒野(今の亀山市)で亡くなり、白鳥となって大和・琴弾原(今の御所市)を経由して古市に飛来しました。その後、河内・埴生野に向かつて羽を曳くように飛び去った」と記載されています。

「白鳥陵」は室町時代から明治時代にかけて、白鳥神社古墳や峯ヶ塚古墳があげられていましたが、幕末、阿闍梨覚峰という僧侶が「前の山古墳が日本武尊白鳥陵にふさわしい」と発表してから、賛同する学者が増え一応の結論に達しました。覚峰は羽曳野市にある聖徳太子の弟である来日皇子墓の中に入って石室のスケッチを残しています。その後、明治

16年に宮内庁も前の山古墳を白鳥陵に治定し、新たに拝所や陵標、鳥居を設置しました。日本武尊が実在する人物が否かは不明ですが、系譜的には応神天皇の祖父にあたり、4世紀中頃の皇族とされています。

考古学的には、白鳥陵古墳は、出土した埴輪や須恵器から5世紀後半の築造であると判明しており、允恭天皇の皇太子木梨軽皇子の墓である可能性や、安康天皇陵とする説もあります。

また、古市古墳群の大王陵級の古墳築造順序では、津堂城山古墳↓仲姫命陵古墳↓応神天皇陵古墳となることから、つまり、津堂城山古墳の被葬者は、応神天皇陵古墳の被葬者の祖父の陵墓の可能性も考えられるわけです。

「日本書紀」仲哀天皇元年冬十一月一日条では、応神天皇の父親である

仲哀天皇が「父の王は既に亡くなった。魂は白鳥となって天に上った。慕い思う日は一日も休むことがない。それで白鳥を陵のまわりの池に飼い、その鳥を見ながら父を偲ぶ心を慰めたいと思う」と言われ、諸国に令して白鳥を献上させた」とあります。つまり日本武尊の陵墓には白鳥が泳いでいたということです。

白鳥といえば、津堂城山古墳からは、我が国最大で一番写実的な水鳥



▶白鳥陵古墳(羽曳野市教育委員会)

古市古墳群の動物を冠する古墳4  
白鳥陵古墳

の埴輪が出土しています。さらにこの水鳥形埴輪は周濠の中の島状遺構に据えられた状態で、まるで3羽の水鳥が泳いでいるかのように出土しました。コハクチョウは夏になると寒い地域に渡り、年齢を重ねれば亡くなります。しかし、埴輪で作っておけば、未来永劫とまでいかなくても、何年ものあいだ最初の状況で残るといったことです。

つまり、津堂城山古墳には、仲哀天皇が父である日本武尊のために作った陵墓のイメージがあるというわけです。

(文化財保護課 上田 睦)